建築の木――田中喬先生追悼

藤原　学　京都大学大学院 人間・環境学研究科

――いまや建築をその初発から尋ね始めなければならぬ。――人は憧憬（ショウケイ）する。己れの成熟を自（ミズカ）ら憧憬する。首を挙げ、高天を俯仰し、己れの完成を目指して立ち歩むべく、定められている。――すべて学び（学）は、終極には、この己れのための学びに帰らなければならぬ。世界に対峙する己れを、思慮深く知ることによって、知ることとして。身をもって知ることによって、知ることとして。

田中喬「憧憬の倫理・建築」（新「建築会館」設計競技応募案設計主旨）

「子埜」は田中先生の号で、「二十世紀中葉日本ノオソラク最高ノ漢詩人」（清岡卓行「阿藤伯海顕彰碑撰文」）と称される阿藤伯海より授けられたものである。先生はほかにも、「知拙」、「愚禿」あるいは「愚愚禿」などとも号しておられたが、「埜」が大地の上に木が生えている象形文字であることを好まれ、伯父でもある漢詩人への敬慕と畏敬とともに、終生この号をお使いであった。

子埜（し や）田中喬先生は平成30年5月28日に逝去された。83歳であった。

昭和9年8月30日、広島県福山に生を受けた先生は長じて建築を志し、森田慶一先生の令名を聞くに及び京都大学に学んだ。第二次大戦後の荒廃した国土を復興すべく小堀澤二先生の元で学究生活に入り、後に転じて増田友也先生に師事した。建築論・建築設計の学統を受け継ぎ建築学教室に奉職、同学玉腰芳夫先生の急逝を承け、教養部図学教室に転籍、教養部改組で発足した大学院人間・環境学研究科教授として京都大学を退職し、神戸国際大学に三顧の礼をもって迎えられ、平成15年3月に教壇を離れ閑雲野鶴の身となられた。その間、多くの学生を教え導き、魅了し、慕われ、建築論の発展に大きな足跡を印された。

知行一致

「人・木・家」と題された講演（京都大学建築学科特別講演、平成15年7月12日、68歳）でご自身の来し方を、50歳の時に教養部に移り6年、大学院人間・環境学研究科にも6年、神戸国際大学にも6年間在籍したと話され、それまでの18年間を同じ年数ずつ異なる所属で過ごした偶然の奇妙な調和ともいえる生涯を感慨深く振り返っておられる。斯様に先生は、身近な出来事をはじめ森羅万象を秩序づけ図式化して話されることを好まれた。

いや、軽々に好みといってはお叱りを受けるだろう。建築家であることの矜

恃と責任を強く自覚されておられた先生は文字通り「図」でお考えになることが常であった。「建築の木」と名づけた図式(Schema)を描き、どのような事柄もそこに位置づけ、全体との関わりの中で考えられていた。目前の、焦眉の、具体的、個別的事象を問題として捉えれば、それが喫緊であればあるほど他を捨象してそのことだけを注視するようになる。通常われわれが無意識のうちに普通に行ってしまっている、全体性を欠くゆえに視野狭窄となることを免れえぬこうした考え方、そしてそれを動因とする行動に潜む危険性を絶えず意識し、その罠ならぬ罠に陥ることのないよう留意されていたからであろう。学問のみならず、どのような些細なことに対してもこのように考え、それを実践された先生の一貫した篤実真摯な知行一致のお姿は、景仰し敬服するよりほかない。

ここに掲げた「建築の木」は、平成8年度「生活・環境構成論」講義初回(4月17日、京都大学総合人間部)に配布されたものである。先生は常々、書物を読む際、その冒頭が枢要で、そこにエッセンスが詰まっているので味読精読するのだと話され、自著もそのように執筆されていた。したがってそこには、講義のイントロダクションとしての概要説明に留まらぬ意味が込められているはずである。とりわけ京大ご退職年度のことであれば、畢生の建築論が、そのエッセンスが描かれているといってよいであろう。しかしながら浅学非才の身であれば、それを論ずるに能わず、ここではただ、判読のための贅言を屋上屋を架すが如く記すのみである。文末の業績リストによって先生のお考えに直に触れ、各々「建築の木」を豊かに育んでいただきたい。———

歳寒後凋

中央、《共生》から上下に幹が伸び、左右には大枝が広がっている。四方に伸びるこの構図はアリストテレスの四因説を踏まえたものである。形相因(eidos)、質料因(hylē)を上下に、始動因(archē)、目的因(telos)を左右に配置した十字形に、建築論の構図としてさらに斜めに4つのボンド(bond、結合手)を加えて米型にする。すると中心から上下左右斜めに8つのボンドが伸びる。中心には主題を、ボンドの先に契機となるキーワードを置く。これが基本形となっている。

《共生》とある中央の太い幹は、やはりアリストテレスの知の階梯をも示している。知覚－記憶－経験－技術－学問的知識(epistēmē)の順、多から一への普遍の順に上へと伸びている(「建築 - 学 初歩」)。《共生》が中心にあるが、主題は知であり、知の幹である。

知の幹から出たボンドには、行う、知る、語る(他の図式では「言う」など、いずれにしてもロゴスに関わる語、以下括弧内は他の図式で用いられた言葉を適宜補う)、学ぶ、見聞する(見るなど、知覚に関わる語)と、動詞が書かれている。左の大枝には始動因とし

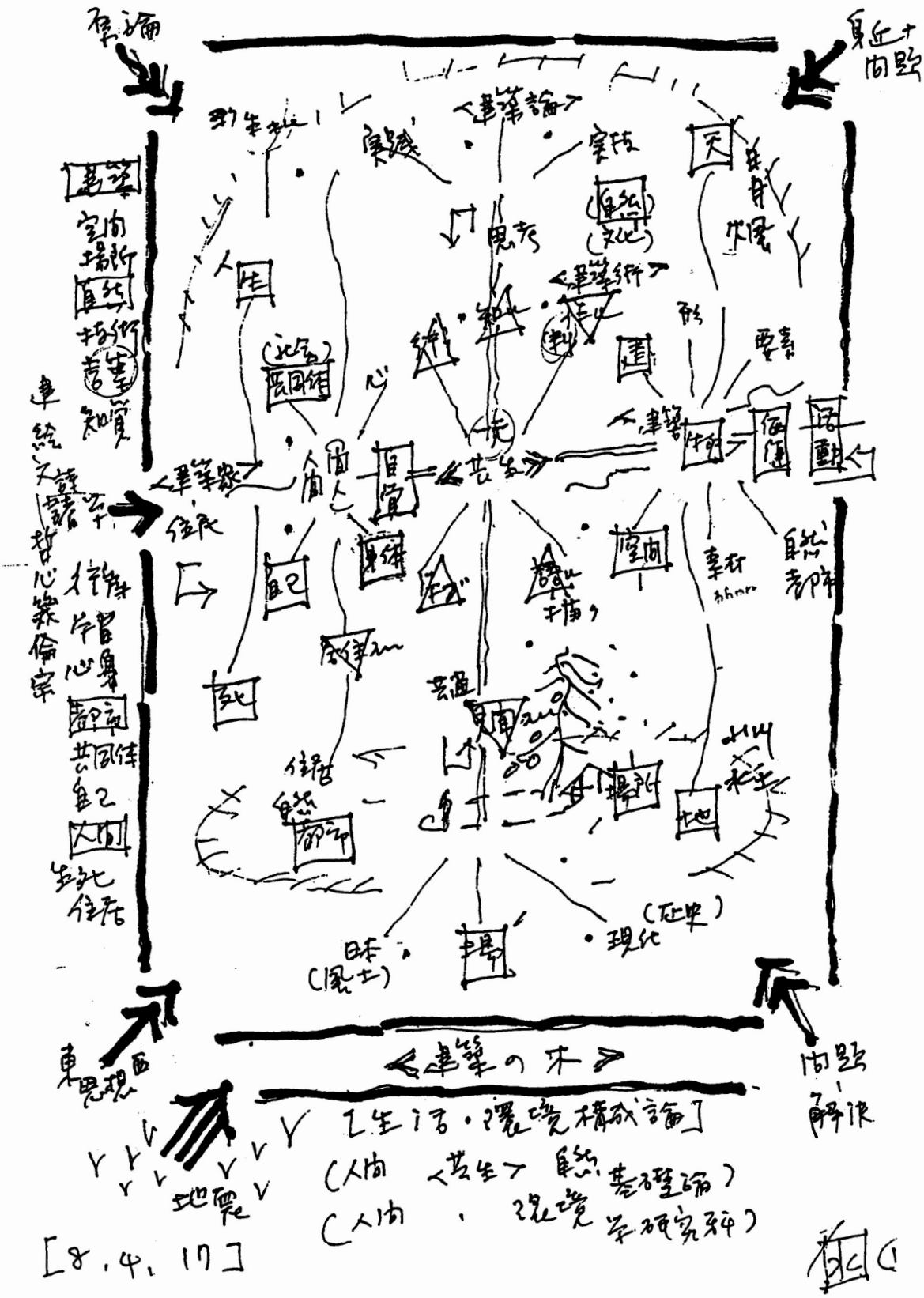

図 「建築の木」

て「人間」が、右には目的因として「建築物」が置かれ、それぞれから小枝のごとくボンドが伸びている。あるいは三本の木が連理のように有機的につながり、文字通り共生し、喬木(きょうぼく)の姿(eidos)に見えるといえば、戯れ(Spiel)が過ぎようか。いずれにしても「建築の木」は「歳寒クシテ然ル後ニ松柏ノ彫(凋)ムニ後ルルヲ知ル」(『論語』子罕篇)と説く古言の如く、いつの時代にあっても常緑を保ち、従容と立つ木として構想されている。

「建築物」の方には、形、要素、価値、自然、都市、素材、空間、建の文字が書かれている。「要素」とは、屋根や窓や壁、柱といった建築物を構成する要素を指し、モティーフと呼ばれることもあった。価値、活動は「機能」と、自然、都市は多くの場合、「敷地」と書かれることがあり、「建」は、森田慶一「構造について」(1924)で説かれる生きた力、つまり建立性、構築性のことである。

「人間」の方の斜めのボンドには、心、身体、自己、共同体(他者、汝とも)と書かれているが、上下のボンドは曲線で示されている。右側「建築物」の方にも同じように曲線が上下に伸び、四角で囲われて、天、地とあるが、それがここにも相当するため略されている。下方へ伸びた曲線の先に「住居」という語があり、「建築物」のそれと混乱するかもしれないが、「人間」と「地」との質料因的関わり方を示していると理解すればよい。

実相観入

「人間」の隣には「間人」と括弧書きされている。M・ブーバーのder Zwischenmenschを、そしてそれを論じた上田閑照『生きるということ』(人文書院、1991)を踏まえた表現である。人は、天と地の間を、神と人の間を、そしてもちろん我と汝の間を生きる。建築家、住民は始動因としてこうした間人であり、主体的に生き、見、聴き、学び、知り、作る。その所産としての建築や都市で活動し、活動することによってこそ建築家であり得、住民であり得、建築家としての主体と成り、主体としての住民と成る。「住民」、「活動」下の折れ曲がった矢印は、こうした往還する事態を示している。「建築の木」はスタティックなものとして描かれてはいない。もとより、木は生長する。大地に根を張り、梢は天空を目指す。それが高ければ高いほど、根もまた深く潜行する。学問的知識(epistēmē)は、学以前に、本質への直覚知(nous)によって先行され、それはすでに知覚に胚胎している(「建築−学 初歩」)とするならば、よく見る者はよく考える者であり、よく考えることのできる者はよく見ることのとできる者なのである。知の幹の上下にも往還の矢印が記されている。

《共生》とは、たがいに異なるとされている複数のものが、つまり「個」が多数集まり、同一の環境下で利害を調整しつつ存在する状態を指すのが一般的である。仮に「建築の木」がそうしたことを意味しているならば、矢印はひたすら

左右に、上下に拡がればよく、往還する――苦肉の策とも思える――鍵の手の形には描かれなかったであろう。多くの「個」を包摂するには、広い拡がりこそが必要だからである。

《共生》の上には、「一元」とある。「多」が「多」として共存しているからこそ共生なのであって、それらが「一元」となってそれぞれの「個」性が消えてしまうならば、もはや「共生」とはいえないのではないか。密着して書かれた二語は、往還する矢印と共に、この図式をさらに注意深く読み解くよう誘っている。

「この人にならば騙されてもよい」、と仰るほどに田中先生は斎藤茂吉に傾倒されておられた。「実相に観入して自然自己一元の生を写」した数多の歌、洞察深い歌論が、この「一元」の一語に凝縮されていると受けとるのが自然であろう。《共生》とは、「個」が「多」として並存する状態をいうのではなく、「多」としての「個」に通底する「自然自己一元」の主客未分の層位に立ち戻り、そこでの共「生」のことでなければならない。戻るといっても、それは平板な、単純な逆行ではなく、比喩である「建築の木」にさらに比喩を重ねていえば、「建築の木」の描かれた紙面が置かれた机の存在を改めて顕わにするようなことであらねばならない。

何を描くにも白い紙がなくてはならず、それも風で宙に舞っていては描きようがない。机の上に置かれ、有る物としてそこに安定してはじめて一本の線が描かれる。そうなるとわれわれは直ちに描線に意識を集中する。他の線との釣り合いを図り、巧拙を気にし、描かれる仮象(Bild)に目を凝らすようになる。そのとき、それが白紙の上に描かれたものであることは忘れられ、ましてや机の存在はすっかり消え去っている。だがしかし、たとえどのような短い線であっても、それには机の存在が必ず参与している。たとえば机に傷があったり凹んでいればどうであろうか。スムーズに描くことはできず、机の傷はガタガタの線となって表出される。このような負の状態において、描画を支える紙面や机の存在が顕わとなるが、それは巧く描けた線であっても変わらない。眼に見える線は、重層した構造の上澄みであって、底に在る見えない堆積がそれを浮かび上がらせている。

「建築の木」の往還する矢印は立体的、重層的でもある。《共生》、「一元」という語からそのことを読み解かなければならない。

詩礼傳家

「建築の木」の根本付近に、一本の木と家が描かれている。比喩としての木ではなく、簡略ながら具体的に描かれているのは、モデルが実在するからである。「建築－学 初歩」の冒頭で触れられている詩人の住まいが、それである。その一部を、(誤植を改め)引用しよう。

ここに隠棲の詩人の一つの詩がある。

龍影喬松宅
鳳音脩竹庭
秋夜問詩禮
瞻仰北辰星（「大簡詩草」）

松が喬く家の屋梁を掩ってたち、庭の叢竹も長く伸びている。主人が此処に住んでいる。秋夜、詩礼を問い、北辰の星を仰ぎ瞻て、端然と住んでいる。星景とともに月光も松にさして、樹の姿は、空天に向けて昇らんとする蛟龍のようにみえる。脩竹のさわぎにも、鳳鳥の声が聞こえる。主人はただ独り、極北の星を仰いで家に住んでいる。（「建築－学 初歩」）

孤高の詩人とその住まいが、格調高く語られる。「ここに一つの世界が全体として具現し〔略〕全体と、統一と、原理とが、いまこの一個の事態に具体、具象して」いる一方、現代社会にあってそれは「生活臭のない隔絶した空想世界であり、甘美なロマンティシズム、うしろ向きの時代錯誤の虚構としてただちに一蹴される筈の世界」（「建築－学 初歩」）でもある。しかし、家は「素材から、それに形相、原型（paradeigma）を付与されて形成され、完成（telos）される」（同上）ものであるならば、その原型に宿る原理を看過することはできない。詩礼を問うすまいとは、どのようなものであろうか。

田中先生は講義で、和辻哲郎の掌篇「土下座」をよく紹介されていた。祖父の葬儀に参列した男が、挨拶のため土下座をして会葬者を見送った心情が綴られている。「ただ漫然と風習に従って土下座したに過ぎぬのです。しかるに自分の身をこういう形に置いたということで、自分にも思いがけぬような謙遜な気持ちになれたのです。〔略〕心情さえ謙遜になっていれば、形は必ずしも問うに及ばぬと考えていた彼は、ここで形の意味をしみじみと感じました。」（和辻哲郎「土下座」、『和辻哲郎全集』第十七巻、岩波書店、1963. 3、404頁）

先生が好んで使われた「文質彬彬」という語に呼応するかのように、形式と内容の相即一致が平易な言葉で綴られている。この文章は、人間の姿勢を論じる際に引用されることが多かったが、それが風習についてであり、何より葬礼での出来事なのであるから、礼の一例として捉え直してよかろう。しかしながら「礼は必ず天に本づき動きて地に之（ゆ）く」（『礼記』礼運）ものであるから、地上の、人間世界の秩序、規範にのみ留まるものではない。

孤高の詩人は北極星を瞻仰した。「自らは静止して、諸々の星々がそれをめぐって、規則正しく動いている。北辰は、それ自体不動のままに、すべてを動かしあらしめている。かくして天上には永遠の秩序が統べている。〔略〕天空星座の秩序を、その永劫の秩序を、この地上の人－間に模したいという希求を逃れることはできない」（「建築－学 初歩」）。東洋の古典を踏まえたこうした詩人

の世界は、現代日本ではかえって疎遠なものに映るかもしれない。しかし、暴論との誹りは免れ得ぬが、ここでシュムメトリア symmetria の語を想い起こせば、どうであろうか。

それは古代ギリシアにおいては、秩序 taxis を数的、量的に理解した、造形において核心的な原理であった。調和 harmonia とは、シュムメトリアによって秩序づけられた状態をいい、天体・人体・建築から国家組織にいたるまで、あらゆる存在者に求められた（森田慶一『建築論』、東海大学出版会、1978. 2、164-5頁）。プラトンに追放されることなく詩人がこの調和したコスモスに住まうならば、そして人倫から国家、天空を貫くハルモニアを真摯に希求するのならば、その人もまた、コスモスに響き渡る調和した和音の、欠くことのできない一音を奏でなければならない。そのすまいも同様である。

「建築の木」には、蒼穹が描かれている。

脚下照顧

隠棲の詩人はその詩の中に、詩礼を問う自身の姿を自画像の如く詠み込んでいる。喬松に寄り添うすまいに端座し、庭の葉音に耳をすませ、極北を仰ぎ見ている。その場面の只中に詩人は居る。と同時に、その場面の全貌を俯瞰するかのような視点からも見ている。自らをその場面の一登場人物であるかのように見る、いわば「意識の意識」（J・P・サルトル）といってよい、自己視の視点が働いている。

このとき詩人は場面の只中に居る当事者でありつつ、その外から全貌を眺める傍観者でもある。場面の内外を自在に往き来する、こうしたダイナミックな事態を、田中先生は空間的に翻案されて「劇場的構成」と呼び、「道」とともに建築空間構成の原型と捉えておられた。「建築の木」はその四周が縁取られているが、それを額縁とも、舞台のプロセニアムアーチともみなしてよいであろう。劇場的構成の動態は、たとえば東山会館（増田友也設計）やルイス・カーンのルームのドローイングといった建築の事例のみならず、フェルメールの『絵画芸術』やM・ボスの夢の現存在分析など、さまざまな資料を用いて説明されていたからである。しかしいずれと呼ぶにしても、額縁には切れ込みが設けられ、閉じられていないことに留意しなければならない。「建築の木」の完成を、そのスタティックな完成を、あえて拒んでいるかのようである。

建築論・建築術は「身近ナ問題」でありつつ、同時にそこから発して、技術者として「問題解決」に向けて、その原因を知るべく、ウィトルウィウスに云われるが如く「諸学」を学び、「東西思想」を拠り所としながら、「原論」を論究する——このように「建築の木」を取り巻く状況が記されている、と一先ず理解することができる。左下に書かれた「地震」も、阪神淡路大震災後の時代状況と符

合しているとも思われよう。しかし額縁をあえて閉じなかったのはなぜか、という問いはいぜん残る。深い意図があるように思えてならない。

冒頭で言及した「人・木・家」講演後の座談で、先生は「増田友也先生から教わった最大のことは、脚下照顧という一語に尽きます」と、学生の問いかけに答えられている。続けて、「足もとを見ろ、ということは、自分自身の一切、そしてみずからが拠って立つ立場そのものも自己否定しなければならない、したがって講演で今日喋ったことすべてもまた否定しなければならない」旨、発言されている。

足もとを顧みる脚下照顧の視線は、先の自己視の視線と重なるが、径庭もある。否定性が両者を隔てている。再び「建築の木」の図式に戻ってみよう。

知の幹の先端、天蓋に届かんとする位置に、〈建築論〉とある。この〈建築論〉はしかし、それが学問的知識(epistēmē)としての〈建築論〉である限り、たとえどれほど高く聳えようとも、「建築の木」の一部に過ぎない。

詩礼を問い「ヨク生キ」んとする人が居て、みずからが生きるその世界を知らんがために詠いあるいは描く自己視の動態を原型とし、質料と形を得て客体化され具現された建物、そのすべてを幹とし、枝とし、葉として拡がり、大地に根を張り、蒼穹の涯、北辰に向かって梢を伸ばす、その全体が「建築の木」である。この全体性として、建築論が描かれたわけである。〈建築論〉から一段と拡がった、より全体的な建築論として描かれたのである。

描かれた建築論、つまり「建築の木」を描く人に着目するならば、その人は画中の詩人と同じことを行っていることに気づくであろう。世界の只中に居て、その世界の全貌を知ろうとすれば、必然的にそこに居る己をも世界の一要素として描かねばならない。描かれた我と世界は、世界の新たな部分となり、再びそれを描かねば世界像は完成しない。かくして自己視は更なる自己視を誘発し、その連鎖は無限に続く。

描画を事例とした自己視の無限進行は、自覚の無限性を論じた純粋経験の哲学に触れ、建築論に引き寄せられる。

> 自覚の出来事を反省と直観との同時の出来事として見る〔略〕。「直観というのは、主客の未だ分れない、知るものと知られるものとの一つである。現実其儘な、不断進行の意識である。」対して、「反省というのは、この進行の外に立って、翻って之を見た意識である。」(『小建築論』196頁)

「建築の木」は、描かれた「物」として、それを描きつつある場面の只中を文字通り生き生きと生きる描き手から離れ、対象化される宿命を胎んでいる。そのこと自身は避けようがないが、見過ごすわけには行かない。場面の内外を往還する動態は、建築にとって、とりわけ建築－術にとって、他のどのような制作

行為よりも顕著な事態だからである。しかしそれを描こうとする自己視の視線は、反省的な視線である。その視線だけでは十全ではない。

> 「摑む」という行為は、先ずもって基本的には「言葉で」摑むのである。摑まれた限り事象は限定されるが、ある限定の仕方ではこの限定によって同時に、無限の余韻が響く。有限に限ることはむしろ余韻としての無限を聞くことであり、聞くためであるとも言われよう。その時、摑むことによって、摑んだものだけが有るものになり、あとは無いものになる（無くなる）という、元々の事態との変質とずれが起こりやすいが、そのような顚倒の危険性を警戒しながら摑むのである。（同上、155-6頁）

> 主－客未分の現前である「純粋経験」は、いわゆる言葉が徹底的に奪われるという根本経験であり、それと一つに、逆に言葉が新たに生まれるという根本経験でもあり、そのような両義的な動態そのものとしての根源的な「言葉の出来事」である。「言葉から出て言葉に出る」と要約される事態として、前者の言葉は通常の分節言語であり、後者のそれは先ずはリアルな感嘆音の発声の謂である。（同上、165頁）

描くことによって摑んだ建築が「建築の木」として、額縁に縁取られる。その限りで余白が余白となって、浮き出てくる。無限の響きを湛えた建築論がここに描かれる。

しかしそれもまた、有る物である。分節言語で以て説明されうるものである。無限の余韻を聞くためには、いったん摑んだものを手放さなければならない。「放てば満てり」と云う道元の言葉と、恩師増田の教えが響き合い、「自分自身の一切、そしてみずからが拠って立つ立場そのものも自己否定しなければならない」。それが図式に反映され、自己視の視線に脚下照顧の視線が重ね合わされ、額縁に切れ込みが入れられる。説明のための言葉をいったん捨て去り、「言葉の騒音の下の原初的な沈黙」（『小建築論』166頁））に帰らねばならない。「礼」とともに「詩」を問わねばならない理由がここにある。建築論が「詠い・抒べら」（『小建築論』291頁））れたのも、同じ理由からであろう。

学問的知識（epistēmē）としての〈建築論〉、人・知・家の全体的建築論、無限の余韻が響く建築論。そして、それさえも捨て去り「絶後再蘇」される建築論。「建築の木」が開示する世界は、底無しに深い。

知行一致・実相観入・詩礼傳家・脚下照顧 —— 子埜田中喬先生は逝った。歳寒後凋の建築の木が遺された。

田中喬先生主要業績リスト

主要著書		
建築（的）事象の研究	京都大学工学博士学位申請論文（私家本）	1976.12
建築術の実践　京都の場合	ナカニシヤ出版	1989.6
建築家の世界　住居・自然・都市	ナカニシヤ出版	1992.4
田中喬講演集	鏡の会（私家本）	1994.8
小建築論　または生活・環境構成論への試み	ナカニシヤ出版	1997.3

主要論文等		
近代集団・時間	日本建築学会論文報告集第89号	1963.9
行動と記号	日本建築学会論文報告集第103号	1964.10
環境の諸相粗描	日本建築学会講演論文集	1965.5
環境：その評価的意味	日本建築学会論文報告集号外	1965.9
環境の記号論	日本建築学会近畿支部研究報告集	1966.5
環境の空間的構造	日本建築学会近畿支部研究報告集	1967.4
建築に於ける概念的志向と視覚的志向	日本建築学会論文報告集号外	1967.10
行動と空間的状況	日本建築学会近畿支部研究報告集	1968.5
建築における空間的志向	日本建築学会大会学術講演梗概集	1968.10
建築的なるもの――ある空間分節について（ノート）	デザイン理論　第7号	1968.11
もの見ない目ともの見る目	自動車とその世界　通巻25号	1968.11
虹	キャノンイメージ　第2号	1969
建築があるということ――万博日本庭園の建築によせて	公園緑地　通巻第148号	1970.3
建築であるということ――万国博日本庭園の建築によせて Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ	掲載誌不明	
実存と建築	日本建築学会大会学術講演梗概集	1970.9
実存と建築的なること	日本建築学会大会学術講演梗概集	1971.9
住まい	河北新報	1972.1.1
住まうことを求めて――二十一世紀へ向っての建築家の立場――	JSSC 日本鋼構造協会誌　第73号	1972.1
記号行動論と建築なること	建築雑誌　第1054号	1972.7
建築的なることの＜定著＞	日本建築学会大会学術講演梗概集	1972.10
実存と建築的なること――アルケーにおける意識の問題	日本建築学会大会学術講演梗概集	1973.10
実存と建築的なること ――アルキテクトニケーとアルケーにおける意識の問題	日本建築学会大会学術講演梗概集	1974.10
実存と建築的なること ――アルキテクトニケーとアルケーにおける自他意識の問題	日本建築学会大会学術講演梗概集	1975.10
建築家の思索の経験から	建築雑誌　第1129号	1977.11
壁への壁	建築と社会　第715号	1981.10
祈り以前の祈りから 印度仏蹟巡礼宿所（ラジギール・クシナガラ）の設計にあたって	祈り　2月号　※掲載誌未確認	1982.2
笑意軒――という――もの　数寄屋造考察への一試論	庭園文化　第6号	1982.11
建築ー学者　小堀先生	『鐸』（小堀鐸二先生定年退官記念事業会）	1984.5
シュンポジオン	『建築論の展開をめざして』（日本建築学会大会昭和59年度歴史・意匠部門研究協議会資料）	1984.10
建築ー学　初歩	建築雑誌　第1228号	1984.12
建築家の世界――建築史と建築論の間	日本建築学会近畿支部研究報告集	1985.5
五月そして夏の日のこと	京大教養部報　第150号	1985.10
建築家の世界――建築史と建築論の間2	日本建築学会大会学術講演梗概集	1985.10
加藤邦男・著・『ヴァレリーの建築論』 ――その日本建築学会賞受賞に寄せて	建築史学　第6号	1986.3
建築家の世界――現代の建築的状況における アーキテクトニケー・テクネーの意味1	日本建築学会近畿支部研究報告集	1986.5
学術総合と図学	図学研究　創立20周年記念号	1987.5
建築家の世界――アーキテクトニケー・テクネーに関連する 知の遠・近の問題	日本建築学会大会学術講演梗概集	1987.10
今後の図学教育――「学術総合と図学」の考察をとおして	図学研究　42号	1987.12
建築・自然・音楽	建築雑誌　第1269号	1988.2

建築家の世界 5 ── よい建築の保全「活動」の問題	日本建築学会近畿支部研究報告集	1988.5
建築家の世界 6 ── よい建築の保全「活動」における「答えー答ええぬ」問答の問題	日本建築学会大会学術講演梗概集	1988.10
京都大学国際交流関連諸施設の計画と設計	『外国人の日本語・日本事情のニーズに関する研究』(山崎和夫研究代表、文部省昭和62、63年度特定研究成果報告書) ※伊從勉と共著	
受賞に際して考えること	建築雑誌　第1287号	1989.7
建築家の世界── アーキテクトニケー・テクネーに関連する知の遠・近の問題　続	日本建築学会近畿支部研究報告集	1990.5
建築家の世界 8 ── 建築術に関連する知の遠・近の問題　1	日本建築学会大会学術講演梗概集	1990.10
建築家の世界 9 ── 建築術に関連する知の遠・近の問題　2	日本建築学会近畿支部研究報告集	1991.5
建築家の世界 10 ── 建築術に関連する知の遠・近の問題　3	日本建築学会大会学術講演梗概集	1991.9
寡黙な人への挽歌	『百足屋町の建築家』(私家版)	1992.4
身近な出来事ーから	京大教養部報　第202号	1992.4
都の景ー観　寸感	JAPAN LANDSCAPE 第22号	1992.5
「幻は死せりこの幻…」京都景観特集号寸感	建築雑誌　第1335号	1992.11
記憶の風景	BCS 建築賞受賞作品ガイドブック	1993.11
The Enbodiment of Linear Perspective Drawing	Proceeding of 6th International Conference on Engineering Computer Graphics and Descriptive Geometry	1994.8
ホスピス設計の始めに	死の臨床　第18号	1995.9
木と家と「共に生きる」	人環フォーラム　第1号	1996.9
墨象の自然	中村二柄監修『現代の書芸術── 墨象の世界』、淡交社	1997.1
視覚の謎──「人間と図学」のために	図学研究　第77号	1997.9
春夏秋冬	京都大学総合人間学部広報　第18号	1997.12
終のすみか── 自然	神戸国際大学紀要　第53号	1997.12
建築 - 術　初歩── 虚白の場から	前川道郎編『建築的場所論の研究』、中央公論美術出版	1998.1
ある断想── 人間・コンクリート・景観	建築と社会　第911号	1998.2
都市ー景観── 歴史的自然へのまなざし	中島克己ほか編『日本の都市問題を考える』、ミネルヴァ書房	2000.3

未定稿		
建築	200字詰原稿用紙79枚	1985頃
建築学	200字詰原稿用紙14枚	1985頃
線的透視図法の身体化	300字詰原稿用紙33枚 ※ The Enbodiment of Linear Perspective Drawing 原文	1994頃

主要設計作品・プロジェクト等		
近衛ホール(京都大学附設外国人研究者宿泊施設)	京都市左京区 ※「建築と社会」1967年11月号	1966
日本万国博覧会日本庭園Ⅰ～Ⅶ号休憩所	大阪府吹田市	1969
右相吉備公館址石碑	岡山県矢掛町	1974
名護市庁舎設計競技応募案		1978
海部東小学校	徳島県海部町	1980
新「建築会館」設計競技応募案		1980
岐阜県口腔保健衛生センター	岐阜県岐阜市 ※「近代建築」1982年11月号	1982
CENTAUR - HOKKE HOTEL in RAJIGIR	ラジギール、インド	1984
CENTAUR - HOKKE HOTEL in KUSHINAGAR 計画案		1984
比叡山定光院行堂計画案		1984
NEPAL-LUMBINI 仏教徒巡礼宿所計画案		1991
万博記念公園日本庭園つつじヶ丘休憩所	大阪府吹田市	1994